

皇學館大学研究開発推進センター紀要 第四号
平成三十年三月一日発行（抜刷）

論
文

伊勢路と紀伊路 — 熊野古道から昔のことを考えよう —

荊 木 美 行

伊勢路と紀伊路 — 熊野古道から昔のことを考えよう —

荊 木 美 行

□ 要 旨

熊野詣のルートは、いくつが存在する。よく知られているのは、京都・大阪方面から、紀伊路・大辺路・中辺路を経て那智に至るコース、そして三重県側では伊勢路と呼ばれる古道がはやくから拓けていた。今回の講演では、道中記や名所図会を手がかりに伊勢路の行程について総括するとともに、和歌山側のルートについても言及する。和歌山県については、王子とその保存に命をかけた南方熊楠についてもふれる。

□ キーワード

伊勢参宮 熊野詣 神社合祀 南方熊楠

はじめに 本日は、「みえアカデミックセミナー」の移動講座にお招きいただき、ありがとうございます。紀北町からのご依頼を受けた際には、「伊勢参宮を終え、田丸（女鬼峠）〜三瀬谷〜大内山〜紀伊長島〜尾鷲までの熊野古道・伊勢路の区間の内容について話してほしい」というご要望でした。また、現在実施している

探訪体験（十一月十二日が探訪の最終回）と相俟って、講座生がより深い理解につながる講演にしたいとのことでしたが、これだけの内容を短時間でお話するのは、なかなかむづかしい注文です。

わたくしは、那智三山や熊野古道のことを専門に研究しているものではありませんが、生まれが和歌山だったこともあり、若いころから、熊野詣には関心がありました。あとでもお話に出てまいります王子についても、大阪から和歌山にかけてずいぶんあちこちの王子社を調査いたしました。わたくしが昭和三十年代から四十年代にかけて父と二人で現地で撮影した古い王子跡の写真も、今となっては貴重な資料です（たとえば、一五八頁に掲げた阿部野王子神社西正門の写真はその一つ）。

また、わたくしは、現在、伊勢市に住んでいる関係で、伊勢参宮や熊野詣のことにも興味を抱いております。それで、自身の関心の範囲でなら、なにかお話しできるのではないかと思います。本日の講師をお引き受けした次第です。

最近の気候もよくなり、熊野古道をお歩きになるかたをあちこちの古道で実際によくおみかけします。あるいは、本日お越しの皆様がたのなかには、わたくしなどよりも豊富な踏査の経験をお持ちのかたも少なくないと思いますが、これか

ら熊野古道のことを学ぼうというかたのお役に立てば幸いです。

熊野古道とは はじめに、すでにご承知のかたも多いと思いますが、熊野古道の概要についてご説明申し上げます。

熊野古道とは、熊野三山(熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社)へと通じる参詣道の総称で、熊野参詣道とも呼ばれています。道は三重県・奈良県・和歌山県・大阪府に跨り、ルートは複数あります。そのうちもつとも利用されたのが、京都から大阪・和歌山を経て田辺に至る紀伊路、そして田辺から山中に分け入り熊野本宮に向かう中辺路です。中辺路は、後鳥羽院・藤原定家・和泉式部といった、歴史上の著名な人物も歩いたとされています。

このほか、田辺から海岸線沿いに那智・新宮へ向かう大辺路、高野山から熊野へ向かう小辺路、そして、伊勢と熊野を結ぶ「伊勢路」があります。また、道が峻険で、一般にはほとんど利用されていませんが、吉野・大峯と熊野本宮をつなぐ山岳修験道である大峯奥駈道というルートもあります。田辺は、中辺路と大辺路の分岐点にあたり、また中辺路ルートの大部分が田辺市にあります。古代から中世にかけて、本宮・新宮・那智の熊野三山の信仰が高まり、多くの旅人がこの道を通って熊野を目指しました。その行列があたかも蟻のようだったことから、「蟻の熊野詣」と云われたほどです。

和歌山側のルートのことは、のちほどあらためてふれるとして、ここでは皆様のもつとも馴染みの深い伊勢路について、もう少し説明を加えます。

そもそも伊勢路というのは、伊勢神宮に参詣するための諸国からの参宮街道をいいます。四日市の日永追分で東海道と分岐し、伊勢平野を海岸に沿って南下、津↓松阪↓神宮へと至るルートを伊勢(本)街道と呼びます。また、その沿線を含めた広い地域を伊勢路と称することもあり、伊勢国の別称ともなっています。参宮ルートとしては本街道のほか、陸路だけでも、鈴鹿峠を越えて津へ向かう伊勢別街道、伊賀上野から入る伊賀(大和)街道、名張からの北街道、高見峠を越

える南(和歌山)街道、南紀州から北上する熊野街道などがありました。いまここで取り上げている「伊勢路」は、このうちの熊野街道のルートを指すわけです。ただ、注意していただきたいのは、伊勢路はこれを和歌山方面から北上して参宮に赴くというよりは、むしろ、参宮を終えたあとの旅人が熊野へ向かう道だったという点です。伊勢路は中世から拓け、東国の武士や僧侶が熊野三山に向かうルートとして利用されました。江戸時代に入ると、和歌山方面を経由するかつての熊野詣が廃れ、かわってこの伊勢路を利用した、一般民衆の旅行者が増加します。すなわち、伊勢参宮を終えた旅行者が熊野を目指し、この街道を利用するのです。ですから、伊勢路は伊勢方面からこれを南下して進み、熊野に到達するための道だったということができません。

観音霊場としての那智 ここでもう一つ注意しておきたいのは、熊野古道を利用した江戸時代の旅人の目的は、三山に参詣する、いわゆる熊野詣ではなく、西国三十三所観音巡礼だったということです。

もちろん三山にも詣でるのですが、彼らが目指したのは、那智にある青岸渡寺です。このお寺は、和歌山県東牟婁郡那智勝浦町にある天台宗の寺院で、本尊は如意輪観音菩薩です。西国三十三所第一番札所として知られていますが、伊勢参宮のあと、熊野に向う人々は、この青岸渡寺を皮切りに、中辺路・紀伊路を逆に辿って、紀伊↓河内↓大和↓京↓摂津↓播磨↓丹後↓若狭↓近江の順で西国三十三所観音霊場を参詣するのです(ただし、近畿地方の住人のルートは、これと異なる)。

ここで、観音信仰について説明しておく必要があります。

神仏習合という言葉がありますが、これは、外来の仏教信仰と固有の神祇信仰とが融合することをいい、神仏混交とも書かれます。平安時代になると、本地である仏、菩薩が日本でかりに神の姿となったと解釈されるようになり、たとえば、阿弥陀如来の垂迹が八幡神、大日如来の垂迹が天照大神であると説く本地垂迹説が起こります。

那智三山も例外ではありません。この本地垂迹説によって、熊野本宮大社の主祭神の家都美御子神は阿弥陀如来、新宮の熊野速玉大社の熊野速玉男神（または速玉神）は薬師如来、熊野那智大社の熊野牟須美神（または夫須美神）は千手観音とされます。「熊野権現」と云う言葉がありますが、「権現」とは「権に現われる」という意味で、仏がかりに神の姿でわれわれの前に現れることを云ったものです。そして、三山はそれぞれ、本宮は西方極楽浄土、新宮は東方淨瑠璃浄土、那智は南方補陀落浄土の地であると考えられ、平安時代後期、阿弥陀信仰が強まり浄土教が盛んになると、熊野一帯が浄土とみなされ、信仰の対象となります。これもあとでお話しますが、院政期には歴代の上皇の参詣が頻繁に行なわれ、たとえば、後白河院などは三十四回も熊野に参詣しております。

三山のうち、後世とくに人気があつたのは、熊野那智大社です。前述のように、熊野牟須美神は千手観音の化身とされていますが、江戸時代にはこうした観音信仰が絶大な人気を博します。

観音菩薩がこれほどの人気を得たのは、ひとえに「現世利益」（この世で受ける仏、菩薩などの恵み。具体的には、無病息災で生涯安穩であることなどを云う）を説くことにあります。願いを唱えれば、衆生の苦悩に応じて三十三の姿に身を変え（三十三観音）、現世利益を叶えてくれるのが、観音菩薩なのです。

観音菩薩を信仰することを観音信仰といいますが、これは、『法華経』『普門品』（観音経）に説かれている、観音の救済活動を主軸として興った現世利益を求める信仰です。三十三身に姿をかえて救済すると説くところから、三十三所観音霊場巡礼の信仰となったのですが、南方の海上に観音の住所といわれる補陀落浄土があり、那智をそうした補陀落浄土とみるのです。

ただ、伊勢参宮を終えた人々で、さらに進んで観音霊場巡礼の旅を続けるひとはけっして多くはありませんでした。あとで出てまいります、伊勢市の西にある田丸という土地は、熊野に向かう伊勢路と上方に向かう初瀬街道の分岐点です。

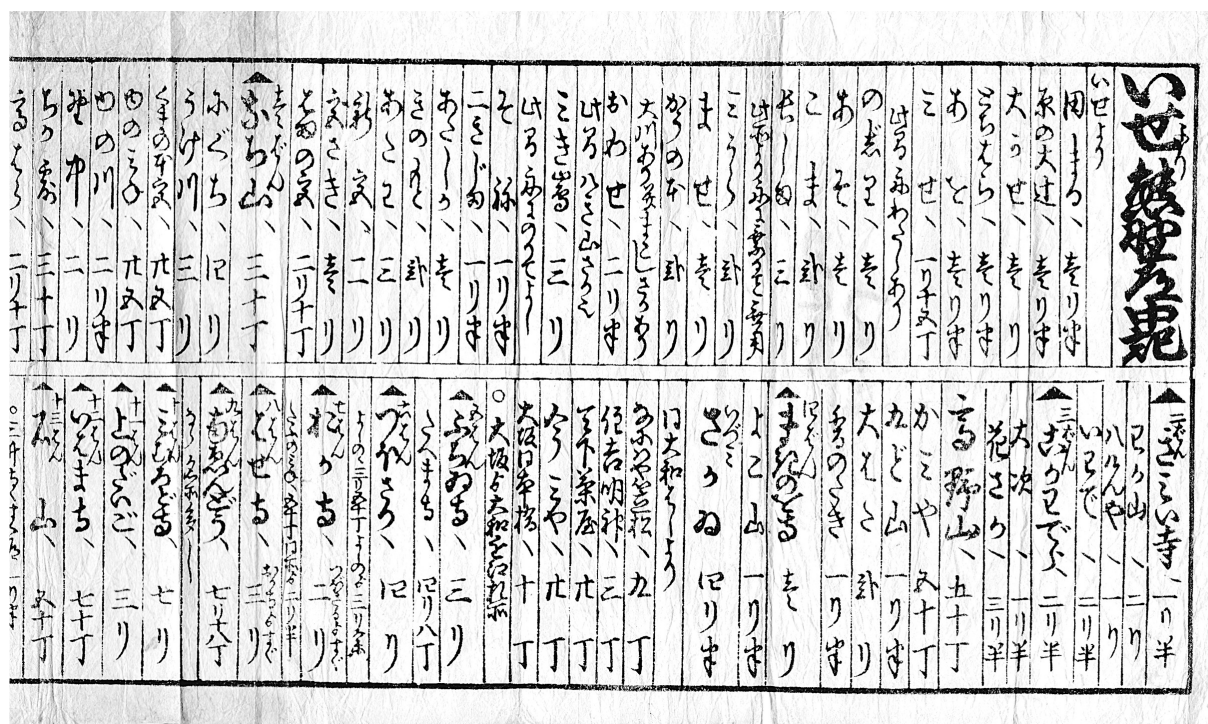
多くの旅人は、ここから初瀬街道をとって上方、すなわち京や大阪に向かいます。これは、物見遊山が目的なのです。上方落語の「東の旅」ネタの「百人坊主」「宿屋の仇」「三十石」には、そうした当時の旅の様子が登場します。旅行者全体からみれば、熊野に向かう旅行者はけっして多いとは云えませんでした。

なにしろ、お歩きになったかたはおわかりかと存じますが、伊勢路は難所が多く、大和方面への旅にくらべると、大袈裟でなく命懸けです。現に旅の途中で力尽きたひともあり、伊勢路のあちこちには、いまも行き倒れの供養塔が祀られています。熊野に向かう旅人は、まことに信心深い人々だったと云えましょう。

旅を書き残す さて、以上のことを踏まえて、伊勢路の旅についていきたいと思いますが、そもそも、われわれはなにによって、江戸時代の旅人の足跡を辿ることが可能なのでしょうか。

資料はいろいろありますが、なかでも重要なのは、道中記・道中案内記・名所図会の三つでしょう（塚本明「伊勢参宮と御師」『三重県史』近世編、五三八～五四二頁）。最初の道中記とは、実際に旅行したひとの旅の記録です。どこに宿泊した、なににいくら使ったとかいうことを、かなり細かく記したものです。従来、道中記は私的な記録としてあまり歴史研究でも顧みられませんでした。三重大学の塚本明先生がその価値を学界に紹介してから注目を浴びるようになりました。尾鷲にある熊野古道センターにもたくさん道中記が集められております。

道中記を残すことには、二つの目的がありました。一つは、金銭出納簿としての役割です。旅人の多くは、伊勢講によって村の人たちが出し合ったお金を路銀として、いわば村の代表者として旅行したわけですから、道中記はその収支報告として重要な意味を持ちます。つぎに、道中記は、はじめて旅行する人々への旅行案内や注意書きとして重要です。道中に関する情報の少ない時代にあつて、旅行経験者の記録はなものにも替えがたい「先達」となったはずですが、道中記をみていると、「海路もあるが危険」とか「この村には宿が二軒ある」とか「渡



しは六文」とかいう記載がたくさん出てまいりますが、こうした情報は、つぎに旅するものにとっては大変ありがたかつたはずです。そして、こうした道中記が残ったおかげで、われわれもまた伊勢路の道中についてかなり具体的なことを知ることができるようなのです。

二つ目の資料は、道中案内記です。これは、旅館経営者などが旅人に配布したチラシで、目的地までの経田地とそこまでの里数などが記されています。一枚ものの刷り物がほとんどで、荷物にならず、携帯するには重宝だったと思われる。ここにお持ちしたのは、わたくしが持っており「伊勢より熊野道中記」というチラシですが（上写真）、これは京都の扇屋正七という旅館経営者の発行したもので、道案内兼広告です。

三つ目の資料は、名所図会のたぐいものです。名所図会とは、江戸後期に盛んに刊行された地誌で、各地の名所旧跡・神社仏閣などの由来や物産などを書き記したものです。安永九年（一七八〇）の秋里籬島編の『都名所図会』や『江戸名所図会』は有名ですが、伊勢参宮については『参宮名所図会』、伊勢路を利用した熊野詣については、幕末の嘉永六年（一八五三） 暁鐘成編『西国三十三所名所図会』が参考になります。これらは、旅行に携帯するものではありませんが、豊富な絵とその解説をみた人たちは、旅情に誘われたにちがひありません。その意味で、江戸時代の旅行ブームの火付け役ともいえる存在です。イラストもなかなか巧みで、現在同じ地点に立つて眺めると、その絵がいかに正確に描かれているか驚かされるがあります。

田丸から逢鹿瀬まで このほかに、熊野古道のあちこちに今も残る道標・常夜灯・供養塔などの石製品は、ルートの復元や往時をしのお縁として貴重ですが、時間の都合でこれらについては省略します。

ではつぎに、これらを手がかりに、伊勢を出立したあとの旅人の足取りを追ってみましょう。

伊勢参宮を終えた人々は、宮川を渡り、田丸に向かいます。宮川には当時橋はなく、渡し舟を利用しました。現在の度会橋附近に二か所の渡しがありました。田丸へ行くのに利用されたのが、柳の渡しです。現在、度会橋の南に尾崎聖堂（行雄）記念館がありますが、このあたりにあった渡しです。面白いことに、今でもこの附近の川岸にはボートが二三繋留してあります。むろん、これは渡し舟ではありません。釣り舟かなにかでしょう。

宮川を渡って、西に真つすぐ進むと、田丸です。さきほどの案内記には「伊勢より田丸 一里半」とあります。この田丸が、熊野街道・伊勢本街道・和歌山別街道の分岐点になります。町のなかにはいまでも道標が残っています（左写真）。塚本先生のご論文により、旅人は田丸で装束を着替えるそうです。旅籠などで販売していた「及摺」という薄い衣をまとい、菅笠を被るそうです。及摺は「おいずる」「おいずり」と云われ、巡礼装束の定番です。尾鷲市にある県立熊野



伊勢路と紀伊路（荊木）

古道センターにはこの実物が展示されていますが、これに年号・住所・氏名とともに「奉納西国三十三所」などと記し、観音霊場を巡ることを明示するのだそうです（塚本明「熊野古道『伊勢路』の特質―江戸時代の道中記から―」『第九回全国歴史の道会議三重県大会報告書』所収、九頁）。

ここから、さらに西に進むと、蚊野を経て原の辻に着きます。ここには、いまは廃寺となっていますが、石仏庵があり、その向かいには三十三体の観音石像が祀られています。この原はまだ玉城町ですが、ここからしばらく行くと、多気町に入ります。天保四年に建てられた道標のある野中を通り、成川を経て最初の峠である女鬼峠に差しかかります。峠を越えると、逢鹿瀬です。ここは、かつて伊勢神宮の神宮寺である逢鹿瀬寺廃寺のあるところです。『熊野街道』が紹介している「西国道中記」（川瀬雅男編、天明六年一月から五月にかけての記録に寛政二年二月から六月までの旅行の記録を加筆追加したもの）には、

大かせ 江 壱里半

茶屋あり 泊り二もよし

次二山坂多し

とあります。旅籠もあつたのでしょう。秋だと、休耕地を利用したコスモス畑の景観がすばらしいところです。

またしばらく行くと、大台町に入ります。柳原というところを通過しますが、ここには千福寺という、やはり観音菩薩をまつるお寺があります。伊勢路は、観音信仰が盛んなところで、あちらこちらに観音菩薩をまつる寺院が街道沿いに点在しています。

三瀬坂峠と瀧原宮 その後、宮川沿いに進んで、その宮川を渡らなければなりません。これが、三瀬の渡しです。「西国道中記」には、

一、三瀬 江 壱り

舟ちん八壱人式文懸、私共八十文宛

次二三せ川と言川有 舟渡し六文宛

渡りて直二三瀬坂とて有 登廿丁斗難所

川向ニハ泊り屋壺軒 三月廿五日

木三十五文 山城屋

米七十六文 五郎七

と記されています。太字の部分は、別筆で、おそらくのちにこの道中記を携えて旅行した人物の加筆でしょう。

宮川を渡し舟で越えようと、式内社の多岐原神社があります。この神社は、神宮の摂社の一つです。ここから、三瀬坂峠を越えようと、瀧原宮の近くに降りてきます。瀧原宮は、内宮の別宮で遥宮と呼ばれています。熊野街道と頓登川(五十川)が交わるところが一ノ鳥居です。頓登川に沿って東へ参道が五〇〇メートルほど続き、瀧原本宮と並宮が鎮座しています。祭神は、瀧原本宮・並宮ともに天照大神で、本宮はその和魂を、並宮はその荒魂を奉斎すると云われています。瀧原宮のことは、神宮の古い記録である『皇太神宮儀式帳』にすでに、「瀧原宮一院。伊勢志摩阿国堺大山中。在_二太神宮以西。相去九十二里。称_二天照太神遥宮之_一。御形鏡坐」とみえています。鎮座の由来は、『倭姫命世記』垂仁天皇二十五年条に、倭姫命が三瀬にて真名胡神の迎えを受け、瀧原の地に至り、「其の処を宇大の大字禰奈を為て、荒草を苅り掃はしめて、宮造して坐さしめき。此の地は皇太神の欲給ふ地には有らずと悟したまひき」という伝承がしるされています。周辺には、ご当地特産の木材の加工品を展示・販売するきつつ木館や、いろんな種類の虫の標本などを展示した昆虫館(現在は閉館)、さらにはキャンプ場などがあり、自然に恵まれた地域です。

峠を越えて長島へ さて、ここから、大内山川に沿って南下し、阿曾・駒を経て、現在のJR梅ヶ谷付近まで来ると、ここから古道は二つの峠越えにわかれます。ツヅラト峠と荷坂峠です。ツヅラト峠は、難所ですが、自然が豊かで、現代人の

ハイキングには最適のコースです。かつてはこのツヅラト峠を通って、紀伊長島に入ったのですが、江戸時代、紀州藩主の命令で比較的楽な荷坂峠の道が整備され、以後はこちらが主流になります。

どちらの峠を越えるにしても、ここが旧伊勢国と紀伊国の国境です。「三重県にあるのに紀伊長島とはこれ如何に？」と問答ができそうですが、峠の以南がかつては紀州藩領だったことに由来する名称です。

さきほど、『西国三十三所名所図会』のことを紹介しましたが、ここに荷坂峠附近からみたと思われる紀伊長島の風景が描かれています。ここで最近わたくしが撮った写真と見比べていただくとおわかりでしょうが、この絵はかなり実写的です。これまで山に囲まれた閉塞的な道を歩いてきた旅人は、この峠から眺める南国のすばらしい海に驚嘆したにちがありません。

紀伊長島については、やはり、さきほどの「西国道中記」に、

一、長島 江 遠し 式り半御坐候

式里

此処よき町家也 是より木の本十六里の間 舟あれ共荒海故 必ず必ず乗べからず 次ノ坂三ツ有 左に海見ゆる 雨天故かなん所斗と覚申候

出口ニ坂あり 峠より海見ゆる 景色能処也

是より田辺迄 室ノ郡

とありますが、「峠より海見ゆる 景色能処也」という追筆は、目の前に開けた海をみたときの感動をよく伝えてくれます。

さて、この調子で那智まで紹介していくと、いくら時間があっても足りませんので、あとはかんたんに申し上げます。

現在の紀北町長島地区を経て海山地区に向かうには、始神峠を越えます。さらに、現在のJR相賀駅を越えて銚子川を渡って馬越峠へと進みます。銚子川は、河口がお銚子のような形をしていたところから、こう名付けられたのだと思いま

すが、渡し舟ではなく、三カ所ほど歩いて渡れるポイントがあつたようです。「道中記」にも、そう紹介したものがありません。

この馬越峠は、石畳がきれいなことで知られていますが、ここが紀北町と尾鷲市の境界になっています。尾鷲からは最大の難所といつてもよい八鬼峠という試練がありますが、以後、海岸沿いに進んで三木峠↓羽後峠↓曾根次郎太郎坂などが続きますが、曾根次郎太郎坂の甫母峠が尾鷲市と熊野市の境になります。八鬼峠が海拔六二七メートルであるのくらべると、半分以下の高さです。さらに進んで、二木島峠・逢神坂峠と峠二つ越えると、新鹿町です。

ここからは、海沿いで難所も少なく、一気に熊野までたどり着くことができず。現在の地名でいうと、熊野市から御浜町、紀宝町と国道42号線に沿って南へ進み、熊野川を渡れば、そこはもう和歌山県です。新熊野大橋の橋桁の下あたりが、成川の渡し場です。いまはその面影がありませんが、渡しを利用した人の往来は古くからそうとう盛んだつたようです。『熊野年代記』によれば、享保二年（一七二七）の一年間に三万六千人もの巡礼が熊野川を渡つたといひます（前掲『熊野街道』八七頁）。一日およそ百人ですから、かなりの数ですね。

ちなみに、さきの「西国道中記」によると、紀伊長島から海路で木本まで行くルートもあつたようです。たしかに船は楽ですが、リスクも大きかつたのか、「必ず乗べからず」と書いていました。ただ、西行法師は、新宮から伊勢に向かう途中、三木浦へ曾根間船を利用したようですから、ところどころ海路によることもあつたのでしよう。伊勢路の例ではありませんが、物資を運ぶのに便利な海路は古くから活用されてきました。たとえば、『日本霊異記』下巻の「沙門誦持方広大乘」沈海不瀆縁 第四」には、ある聲とその舅が、平城京から陸奥国に船で旅行する話が出ています。むしろ説話ですが、この話は、奈良時代に都から陸奥国への交通ルートとして海路が存し、多くの船が往来していたことがうかがわれます。おそらく、熊野灘沿岸でも、船による往来はふつうにあつたの

ではないかと想像されます。

さて、さきほど伊勢路は難所が多いというお話をいたしました。山また山のコースであることは、以上に紹介したルートからもわかりただけだと思ひます。わたくしなどは、伊勢から南紀に向かうときは、以前なら国道42号線、現在では紀勢自動車道を利用してあつと言う間に尾鷲市・那智勝浦町に到着してしまふものですから、なかなか「難所」という言葉が実感できません。

しかし、いったん車を降りて徒歩に切り替えると、これが大変な道程だということになります。とくに、現在の大紀町の大内山地区あたりに差しかかると、周囲の高い山がまるで行く手を阻むような威圧感をもって迫つてきて、圧倒されます。

紀伊路と王子 さて、伊勢路の話はこのあたりでいったん切り上げ、ここでちょっと和歌山側のルートについてお話ししておきたいと思ひます。

最初に紹介したとおり、古代から中世にかけて、浄土信仰の昂揚とともに、多くの人々が都から熊野に参詣しましたが、その大部分は紀伊路から中辺路を利用しました。ここで注目したいのは、京都を発し、本宮を経、新宮・那智に至る参詣路の沿道には、王子と呼ばれるお社が祀られていたことです。これが、いわゆる熊野九十九王子です。

九十九王子のことは、十世紀末ごろに出来た古い文献（増基法師『いほぬし』）にもすでにその名がみえますが、爆発的に増えたのは十二世紀ごろ、すなわち、熊野詣での全盛期です。淀川尻の窪津（大阪市中央区、有名な渡辺津にあり、渡辺王子・大渡王子とも云われる）を起点とし、紀伊路に沿って本宮、新宮から那智社までの間、およそ三十一町餘ごとにありましたが、実際に九十九あつたわけではなく、確認できるのは八十数社です。

王子がなにかは、諸説あります。熊野権現の遥拝所だという説がありますが、王子で熊野を遥拝したという記録は見当たりません。記録によるかぎりでは、こ



ここに幣帛へいぶくを供え、般若経を讀経し、さらには各種の芸能がおこなわれています。途中の休憩所だという説もありますが、上記の各種行事のために長時間滞在するわけですから、休憩所といえなくもありません。しかし、休息は本来の目的ではなかったようです。

王子が数多く設けられたのは、皇族や貴族の熊野詣での「先達」、つまりガイドを務めた山伏の力が大きかったようです。熊野信仰は浄土思想が強く影響していますが、修験道の影響も少なくありません。

修験道とは、古くからある山岳信仰が、外来の密教・道教・儒教などの影響のもとに、平安時代末に至って一つの宗教体系を作りあげたものです。厳しい山岳修行によって超自然力を獲得し、その力を用いて呪術宗教的な活動をおこなうことを旨とする、ひじょうに実践的な儀礼中心の宗教です。

古来、険しい山岳は、神霊のいる他界として崇められてきましたが、奈良時代

になると、外来の仏教や道教の影響をうけた宗教者たちが、山岳で修行したうえで、陀尼や経文を唱えて呪術宗教的な活動に従事するようになります。のちに修験道の開祖に仮託された、有名な役小角えのおづみ(役行者)も、葛城山で修行した山林修行者の一人だと云われています。

平安時代になると、最澄や空海による山岳仏教の提唱もあって、密教僧たちも好んで山岳修行を実践します。醍醐寺を創建した真言宗の聖宝しょうぼうや比叡山の回峰かいほう行ぎやうを始めた相応そうおうなどは、とくに有名ですね。そして、山岳修行の結果、加持祈禱かじきとらうにおいていちじるしい効験をあらわした密教僧は、修験者と呼ばれるようになります。修験者は、山に伏して修行したことから山伏とも呼ばれます(ジャパナレッジ版『世界大百科事典』「修験道」〈宮家準氏執筆〉)

この山伏たちは、吉野の金峰山きんぷせんや熊野を拠点として大峰山に入って、各地の霊地で修行した関係で、皇族や貴族の熊野詣で先達も務めたのです。紀伊路沿いに点在する王子は、この山伏が組織的に編成・設置したものです。小山靖憲こやますけのり先生は、王子と宿しゆくの関係を指摘しておられます。宿とは、中世の大峯に百以上あった修験の行場、あるいは勤行しんぎやうの場所、岩・巨木・滝など神仏の宿るところのことで、小山先生は、山伏たちによってこれが熊野参詣道に持ち込まれたと考えておられます(『熊野古道』一〇〇頁)。

じつは、「王子」という名称も、修験道と密接なかわりがあります。王子の代表格である若王子にぎわかみ(熊野の御子神である若宮)については、『梁塵秘抄』に、熊野権現の分身として靈験あらたかに出現するとか、王子が熊野権現の御子神であるという歌があるのですが、これらを総合すると、王子は熊野権現の分身として出現した御子神だといえます。それを「王子」というのは、修験道では、峰中などで修行者を守る神仏は童子形をとって荒々しい力を発揮するからでしょう。大峯では八大童子、葛城では七大童子を祀るのですが、王子もこれらと類似した神仏と考えられていたのでしょう(前掲『熊野古道』九八―一〇〇頁)。

廃絶する王子 王子のなかには、山伏が新たに置いたものもありましたが、多くは、もともと鎮守の森として地元民が崇敬していたお社も少なくありませんでした。しかし、熊野詣の衰退とともに、王子のなかにも寂れるものが多数ありました。ただし、江戸時代には、紀州藩主徳川公が和歌山領内の諸王子を再興したり、場所不明のものについては所在の闡明につとめたりしたので、ずいぶん保全されました。これは、徳川公の功績です。

平成十一年（一九九九）、和歌山県を中心に「熊野自然体験博」がおこなわれましたが、このとき、王子跡には統一的な掲示板が建てられました。当時和歌山県知事だった西口勇さんというかたは、ことのほか王子の顕彰に熱心で、『くまの九十九王子を行く』というご本も出版されたほどです。しかし、現在では、ほとんど痕跡を留めなかったり、他の神社に合祀されたりして、廃絶したものがほとんどです。

王子廃絶の大きな原因となったのは、明治三十九年（一九〇四）に出された神社合祀令じやうしれいといわれる政府の命令です。これは、一町村一神社を基本として、すでにある神社を整理しようとした法令です。神社合祀の目的は、神社の数を減らし、残った神社に経費を集中させることで、一定基準以上の設備・財産を備えさせ、神社の威厳を保たせて、神社の継続的経営を確立させることにありました。

この法令は、古い由緒ある神社については例外的に存続させてよいことを認めており、それほど厳格なものではありませんでした。ただ、この通達を受けた県知事は処理を郡長に委ねたため、郡長のなかにはこの法令をかなり厳格に実施しようとしたひとがいました。その結果、県によっては神社の整理がかなり進みます。資料によると、全国で大正三年（一九一四）までに、それまで約二十万社あった神社のうち、七万社が取り壊されたといえます。

とくに合祀が甚だしかったのは、三重県・和歌山県・愛媛県で、三重県などは九十%も減少したと云われます。合祀を拒んだ神社もあったのですが、なかば強

制的に合祀がおこなわれたそうです。

氏子・崇敬者の側としては、反対集会を開くこともあったが、主として大きな運動もできず、合祀によって廃された神社の祭神が祟りを起こしたなどと語る形でしか不満を示すことはできなかったと云います。

南方熊楠の反対運動 当時、和歌山県にあって、神社合祀に真っ向から異を唱え、反対運動を展開したのが、有名な南方熊楠みなみくまのすけです。

南方熊楠は、いろいろな方面で業績を残した国際的な学者で、われわれのような凡人にはちょっとつかみどころがありませんが、なかでも、生物学・民俗学の分野での業績が顕著です（笠井清『南方熊楠』〈人物叢書145〉・飯倉照平『南方熊楠』〈日本文物評伝選〉などすぐれた伝記がある）。

彼は、和歌山市に生まれ、旧制和歌山中学（現在の和歌山県立桐蔭高校）を経て、大学予備門（東京大学教養課程の前身）に入學します。ここを中途退學して、しばらく和歌山に戻ったあと、アメリカ・イギリスに留學し、動植物学を研究しました（ただし、満身に卒業したところはなく、熊楠の最終學歴は、和歌山中学卒ということになる）。ロンドン滞在中は、大英博物館で考古学・人類学・宗教学を自學しながら、同館の図書目録編集などの職につきました。しかし、留學中に父が他界し、日本からの仕送りがちらになり、生活苦に耐えかね、明治三十三年（一九〇〇）に帰国しています。一時的に和歌山市や熊野で生活したあと、知人を頼って訪問した和歌山県田辺町（現在の田辺市）をいたく気に入り、ここに定住します。そして、粘菌類ねんきんるい（現在は、「変形菌」と呼ばれる）などの採集・研究を進めるかたわら、『太陽』『人類学雑誌』『郷土研究』『民俗学』『旅と伝説』などに民俗学関係の論考を多数執筆し、柳田國男やなぎたにくにおとも文通がありました（ジャバンナレッジ版『日本大百科全書』「南方熊楠」〈井ノ口章次氏執筆〉）。

その熊楠が、田辺にあって神社合祀令に激しく抵抗し、その反対運動を繰り返しました。彼は、神社合祀による共同体の信仰の破壊と、環境破壊を憂えたの

です。

彼は、東京大学の松村任三・白井光太郎、和歌山県知事川村竹治といった政治家や学者に書翰を送って応援を求めます。とくに、松村任三にあてた書翰二通が、柳田國男の手で『南方二書』という小冊子に編まれ、識者に配布され、大きな影響を与えました(平凡社版『南方熊楠全集』第七卷所収、現在は南方熊楠顕彰会から原簿の翻刻が出版されている)。このほか、明治四十五年(一九一〇)に『日本及日本人』五八〇・五八一・五八三・五八四号に連載した「神社合併反対意見」(前掲『南方熊楠全集』第七卷所収)は、有名です。この意見書によると、合祀には、

- ①合祀先の新社が遠く、参詣が困難で、これによって敬神の実をあげえない、
 - ②合祀によって氏子間に亀裂が生じ、自治機関の運用にも支障を来す、
 - ③祭礼による経済効果がなくなり、地方が衰頹する、
 - ④合祀によって、神を崇める風習が廃れ、教化的役割を果たさなくなる、
 - ⑤合祀は愛郷心を損ずる、
 - ⑥合祀は土地の治安に悪影響があるだけでなく、合祀による神林の伐採がもたらす弊害も少なくない、
 - ⑦合祀は史蹟・名勝を損ない、古伝を湮滅させる、
- といったデメリットがあります。合祀を厳しく批判しています。とくに最後の⑦は、彼が研究の対象としていた粘菌が、鎮守の森の破壊によって滅びることを憂えたのです。

こうした反対運動によって、神社合祀は次第に収束し、帝国議会での答弁などを通して、明治四十三年(一九一〇)以降、急激な合祀は終熄します。しかし、ときすでに遅く、あちこちで合祀が行われ、多くの神社が姿を消したあとでした。じつは、和歌山県下の王子も、このとき合祀の煽りを喰って廃絶したのもも少ないのです。熊楠は、由緒ある王子が他社に合祀されることの弊害を古い記録などを引用し、切々と訴えましたが、彼の熱心な反対運動にもかかわらず、取り

潰された王子社も少なくなかったのです。『南方二書』では、松村任三にあてて「これがため、御承知の熊野九十九王子、すなわち諸帝王が一步三礼したまえる熊野沿道の諸古社は、三四を除きことごとく滅却、神林は公売されぬ」(前掲『南方熊楠全集』第七卷、四九二頁)と嘆じ、さきの意見書にも「むかし京都より本宮に詣づるに、九十九王子とて、行幸、行啓の際に必ず奉幣祈願、また御宿躰されし分社あり。みな風景良く名所なり。これらの多くは滅却伐絶されおわりぬ」(同上、五七二頁)とのべ、口惜しさを隠せない様子です。

いま、中辺路などを歩くと、わずかに残った王子やその痕跡をみる事ができます。かつては、やんごとなき人々が足を止めて祈りを捧げた王子が荒廃してしまつたのを見ると、淋しいやら口惜しいやら、切ない気持ちが入り込んできます。皆様も、伊勢路だけでなく、広く和歌山県まで足を延ばして紀伊路や大辺路・中辺路を歩くこともおありかと存じます。世界遺産になってから、熊野古道人気もいっそう盛り上がりを見せています。健康のためとか、充実した余暇を過ごすためとか、それぞれ熊野古道をお歩きになる目的がおありかと存じます。もちろん、どんな目的で古道を愉しんでくださってもかまわないのですが、道で目に留まつた王子をご覧になって、かつて盛んだった熊野詣に思いを馳せることもたいせつではないかと思えます。

また、自分の足で古道を踏み締めながら、かつてそこを歩いて熊野に向かった人々の信仰心や、あるいは、彼らのために道標を立て、常夜灯に明かりを灯し、石畳を整備し、旅行者の安全な旅をサポートした路次の住民たちの優しさに思いを致すことも、悪くはないと思えます。伊勢路には「古道」といわれるに相応しい長い歴史があり、この街道にはここを訪れた多くの人の思いが込められています。本日の講演で「古道から昔のことを考えよう」という副題を掲げたのも、そうしたわたくしの思いからなのです。長時間、ご清聴、ありがとうございました。

【参考文献】

- ・みえ熊野学研究会編『熊野道中記』（東紀州地域活性化事業推進協議会、平成十一年三月）
- ・伊勢文化舎・企画室KAZU編『世界遺産熊野古道を歩く』（東紀州観光まちづくり公社、平成十一年四月）
- ・伊藤文彦『熊野古道伊勢路を歩く』（サンライズ出版、平成二十七年六月）
- ・三重県教育委員会『歴史の道調査報告Ⅰ 熊野街道』（三重県教育委員会、昭和五十六年三月）
- ・小山靖憲『熊野古道』（岩波書店、平成十二年四月）
- ・熊野路編纂委員会編『熊野中辺道路 古道と王子社』（昭和四十八年）

※ほかにも、多数の先行研究を参照しました。とくに、事項説明に関しては、ジャパンナレッジやウイキペディアなどを活用させていただきました。先学の成果に対し、お礼申し上げます。

〔附記〕

小論は、平成二十八年十一月二十七日に開催されたみえアカデミックセミナー二〇一六移動講座（於三重県北牟婁郡紀北町東長島公民館）において、「伊勢路と紀伊路―古道から昔のことを考えよう―」という題目で講演した際に用意した原稿をもとにしている。当日は、時間の都合で省略した部分もあるが、ここでは原稿をそのまま掲載し、参考に供する次第である。

（いばらき よしゆき・皇學館大学研究開発推進センター教授）

Pilgrims to Kumano Sanzan and Their Travel

IBARAKI Yoshiyuki

【Summary】

In the Edo period, a pilgrimage to Kumano Sanzan became popular and many people visited Kumano. Kumana kodo is the roads leading to Kumano Sanzan (three major shrines, Kumano Hongu Taisha, Kumano Hayatam Taisha and Kumano Nach Taisha) in Wakayama Prefecture. Kumana kodo has several routes, for example Nakahechi, Ohhechi, Iseji and so on. Some people walked to Kumano through Nakahechi others go there Iseji after visiting the Grand Shrines of Ise. In this paper, I introduce some travelers to Kumano Sanzan and their trips and analyze the belief in Kumano in the Edo period.

【Keywords】

Pilgrimages to the Grand Shrines of Ise · Pilgrimages to the Kumano Sanzan ·
Enshrining together · Minakata Kumagusu